

Book Review



ゴールを見据えた インプラント治療計画のための CT 活用術 ステント製作・画像解析・ガイドドサージェリー

稲垣将文・小川洋一・高村宗俊 著

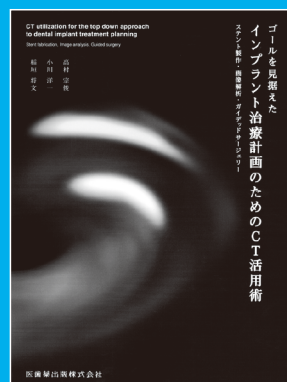


Reviewer

嶋田 淳 Jun Shimada

(明海大学歯学部病態診断治療学講座)

A4 判変, 134 頁
定価 8,400 円
(本体 8,000 円+税 5%)
医歯薬出版刊



インプラントの埋入位置と方向、深度は上部構造の形態に決定的な影響をもたらす。形態は文字通り審美性に直結する問題であり、不自然な形態のインプラントは、咬合接触関係の不調和からインプラントの破折や緩みといった機械的問題や、清掃性や軟組織形態に影響をあたえてインプラント周囲炎の発生に関与し、結果としてインプラントの生存率と有意に関連する。本書『ゴールを見据えた インプラント治療計画のための CT 活用術』の内容の一貫したテーマは、インプラント治療のゴール、すなわち「上部構造」を見据えたインプラント治療である。

インプラント埋入はトップダウントリートメントで行うべきとされてから久しいが、印象採得後模型上で作製した診断用ワックスでの人工歯配列とそれを透明レジンに置き換えて作製したステントを埋入に使用しても、方向が予定したものと差異が生じているものをよくみかける。すなわちトップ（補綴物）の形状が正確にダウン（インプラント体）に反映されていないのであ

る。こうした事態を避ける方法、すなわち本書のもとめる「トップダウントリートメント」とは、上部構造の形状と位置、および埋入方向の情報をもたせた診断用ステントを CT 画像上に顎骨とともに描出させることによって可能とした「究極のトップダウントリートメント」である。

そのために重要なことが二つあると本書では力説されている。すなわち、CT 検査のないインプラント治療はありえない。さらに、採得した CT のデータを十分に活用せずに正確なインプラント埋入は不可能である。簡潔にして正に真実をついた提言である。

本書は診療放射線技師の高村宗俊先生、歯科放射線科医の稲垣将文先生、インプラント治療医の小川洋一先生がそれぞれの立場から、インプラントの術前検査として CT を使用する際に重要な撮影法や画像処理法、画像解析や診断法について詳細に記述されている。

究極のトップダウントリートメントを即症例に活かしたい臨床家は、まずは第 2 章を読み CT 診断に活かせるス

テントの作製法を把握してほしい。その結果得られた CT 画像の読影法とそのデータに基づいた外科用ステントの作製法は第 7 章に記述してある。正確なインプラント埋入はガイドドサージェリーであるが、それについても第 8 章に詳述してある。もちろん、CT 画像の構成の基本理論等についてももちろん他の章に多くの写真や図表を用いてわかりやすかつ理論的、詳細に記されているので、臨床の合間に一瞥するとよい。

本書には、CT の原理から撮像法まで基礎的知識から応用までたいへんわかりやすく記述されており、またそれ以上に、豊富な挿入写真や図表を用いてインプラントと CT との関連を集約して解説してあるので、写真と図表を見るだけでも、目から鱗が落ちる感覚で一気に関連できる。

本書は、CT 画像を日常的に扱うインプラント専門医はもとより、これから CT を導入して診断に活用したいと考えている臨床家にもぜひ推薦したい一冊である。